



サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂における和歌山文化プロジェクトの様子(2014年5月)

世界遺産ナビ **pamon**

連載

人が守り未来へ繋ぐ世界遺産の現在地

取材・文



NPO法人
世界遺産アカデミー
客員研究員
飯島 一隆

二つの巡礼路の先に辿り着く、 思想や民族を越えた繋がり

2024年4月25日、和歌山県田辺市において、共に世界遺産に登録されている日本の熊野古道とスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路、その双方を「共通巡礼」した人数が10,000人を突破したことが発表された。

「共通巡礼」とは、田辺市とサンティアゴ・デ・コンポステーラ市が共同で取り組むプログラムで、2つの巡礼路のうち、それぞれ定められた区間を踏破し、

両方達成した場合に達成者として認められる。

このプログラムの開発に至るまでの過程と現在の取組について、**和歌山県世界遺産センター**（以下「**和歌山県**」と表記）と**田辺市の職員の方々**にお話しを伺ったところ、そこには世界遺産という共通言語をもとに、日本とスペイン、遠く離れた二国間の協働により、国家や思想、民族を越えて繋がる世界の人々の新しい交流の形があった。

和歌山県とガリシア州による 姉妹道の提携、そして旧市町村合併。 激動の歴史を紐解く

—— 1985年、スペイン・ガリシア州の「サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂」が世界遺産に登録されるのをきっかけに、1993年にこの大聖堂に繋がる「スペイン国内の巡礼路」が、さらに1998年には、このスペインの巡礼路に繋がる「フランス国内の巡礼路」も世界遺産に登録されました。そしてここ日本では、2004年に熊野古道を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されます。スペインとはもともと交流があったのでしょうか。

（和歌山県）はい、例えば和歌山県とスペインの

交流に至ったきっかけとして、1998年8月に和歌山県の副知事がスペインを訪問し、ガリシア州の首相に姉妹道提携を申し入れ、10月に正式に「姉妹道」提携に至ったのが大きな要因の一つと考えます。

この提携により互いに世界遺産登録された巡礼道を有する県・州として連携し、中長期的には青少年交流プログラムによって代表団を相互に派遣するなど、県や市、民間での様々な交流が始まりました。

2001年には和歌山県に世界遺産登録推進室を設置しました。この年にはちょうど、ユネスコ世界遺産センターと日本政府の共催で、和歌山県を会場として「信仰の山の文化的景観に関する専門家会議」が開催されました。信仰の山として4つに類型化して整理された中で、紀伊山地の霊場は「山の一部に神聖な場所がある山」「神聖な儀式や儀礼が行われる山」に該当するものと整理されました。

—— ユネスコは1992年に文化的景観を導入して以来、種別・地域別の専門家会議を開き、比較研究や価値評価の基準の枠組みを検討するよう呼び掛けていました。信仰の山については特にアジアや太平洋において取組が進み、2000年に開催された世界遺産委員会にて、「アジア・太平洋地域における信仰の山の文化的景観に関する専門家会議」を日本で開催することを決定したと認識しています。それが翌2001年（「紀伊山地の霊場と参詣道」が暫定リストに登録された年）に和歌山県で開催されたのですね。

（和歌山県）はい。2003年1月にUNESCOに推薦書を提出し、2004年7月に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録されました。世界遺産登録によって観光客（もっとも当時はインバウンドというより日本人観光客）による、ゴミのポイ捨て等の問題も若干ありました。当時は旅行会社を通じた大型バスによる団体の観光客が多かった特徴があります。古道を歩く距離も短く、日帰りも多く、利益が落ちにくい観光地であったとも言えるかもしれません。

（田辺市）道の世界遺産として、広域な環境整備が必要とされていた矢先に、2005年5月に1市2町2村（旧田辺市・龍神村・中辺路町・大塔村・本宮町）が市町村合併し、新しく今の田辺市が誕生します。それまで、5つの旧市町村それぞれの観光協会が集まって受入環境整備を議論していたのですが、2006年には第三セクター「（一般社団法人）田辺市熊野ツーリズムビューロー」を設立しまして、ここが田辺市全体の観光地の磨き上げ、受入環境整備、プロモーション等を一体的に担っていくことになりました。

サンティアゴ市観光局と 田辺市熊野ツーリズムビューロー による共同プロモーション、 そして田辺市との観光交流協定

—— 「田辺市熊野ツーリズムビューロー」の熊野古道に対する取組を教えてくださいませんか。

（田辺市）様々にありますが、世界遺産ということであれば、2008年にスペインのサンティアゴ市観光局と「共同プロモーションに関する協定」を締結したことをきっかけに、取組の幅を広げたと考えています。それまで国内観光客が中心であった熊野古道に、外国人観光客がやってくるようになりました。すると例えば英語などの案内や説明書きが無いことが課題として挙げられ、田辺市熊野ツーリズムビューローでは、公募によって、英語ができて熊野の歴史や信仰に精通するカナダ人のBrad Towle氏を採用しまして、外国人観光客の受け入れに対する整備に力を入れました。

具体的には、古道の看板や掲示板、観光案内所、ウェブサイトやパンフレット等に英語を含む多言語で表現しました。ただ直訳すれば良いものではなく、熊野の信仰や巡礼が伝わる形で表現しなければなりません。その点Towle氏はすでに本宮町で外国語指導助手として活躍されていた経験や、また愛・地球博カナダ館ホスティングスタッフとしての経験も最大限発揮されたと思います。

また2009年に熊野本宮館和歌山県世界遺産センターがオープンし、館内エリアにおいてサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路に関する常設展示も行っています。



▲和歌山県世界遺産センター常設展示



▲熊野本宮館内ショーケース

—— なるほど、共同プロモーションによって海外からの来訪者の増加と、双方の巡礼路の理解促進に繋がったんですね。こうした取り組みの蓄積から、共通巡礼手帳が誕生するわけですね。

2014年5月、今度は田辺市とサンティアゴ市とで観光交流協定を締結しまして、翌年2月に、具体的な活動として「共通巡礼手帳」が両市で開始されました。これもTowle氏によってサンティアゴ市やサンティアゴ観光局と情報交換して、具体化していききました。

共通巡礼手帳とそれによる地域への波及効果について

—— 共通巡礼手帳について教えてください。

(田辺市) 共通巡礼手帳は、片面は熊野古道、もう片面はサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路のスタンプ台紙となっており、それぞれの道中に設置されているスタンプを集め、歩いた道のりを記録していきます。熊野古道の一部の指定された区間を徒歩で巡礼することと、サンティアゴ巡礼路を徒歩または馬で少なくとも最後の100km以上を巡礼(自転車なら200km)すること、この2つの条件を満たすと達成したことになります。

—— 共通巡礼手帳によって熊野古道やその周辺地域に変化はありましたか？

(田辺市) もともとサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路を歩く各国の巡礼者や観光客は非常に多く、そこで共通巡礼地としての熊野古道を知り、実際に来日される方々が増えました。共通巡礼を開始した2015年は約150名、2016年は約300名、2017年は約500名と伸びていき、コロナを経て直近では2023年度は1,700名、2024年度は3,200名と増え続け、開始以来の累計ですと昨年4月に記念すべき10,000人を超えるなど、多くの共通巡礼者が訪れています。

また巡礼路のあるフランスやスペイン人だけでなく、世界各国から訪問いただいています。例えば開始以来2025年9月末までの累積で、共通巡礼達成者の国籍や地域別を見ると、1位は日本(約17%)ですが、大きな差がなく次いで2位が台湾(約15%)、3位がアメリカ(約14%)、4位がオーストラリア(約11%)、そして5位が中国(約10%)です。また同

● 左：共通巡礼証明書、右：共通巡礼手帳



様に累積で、70か国以上の国籍の方々が達成されています。

共通巡礼を達成した人数を累計で500, 1000, 5,000, 10,000人に達した時に特別に表彰をしているのですが、共通巡礼の達成者からは、「大変誇りに思う、双方の巡礼道の結びつけがより深くなってほしい」「これまで複数回来日しているが、このような日本人との交流ができてうれしい、とてもエキサイティング」「どちらの道もチャレンジし甲斐があり、世界中の人々と出会うことができる」「巡礼で多くの人々に出会い、皆家族のように思う。文化や考え方が違っていても人は皆同じだと感じた。」といったコメントも頂いています。

その他、宿泊施設も増加傾向にあり、地域経済への恩恵も感じています。それも一気に大型の施設が増えるというより、国内資本の小規模な施設が緩やかに増加している印象です。

—— 共通巡礼手帳によって、両国だけでなく世界中の巡礼者や観光客に熊野古道を知ってもらい、そしてその価値に共感してもらおう機会に繋がっているんですね。観光による地域経済への波及についても、急激な開発は時に大きな地域に負担をかけますが、悪影響を低減した形で地域の発展に繋がっていると認識しました。一方、何か課題等は生じませんでしたでしょうか。

(田辺市) 例えば最近ですと、手帳にスタンプを押すことが目的となっている方々も見受けられますね。あくまで手帳は巡礼の結果として認識してもらいたいです。巡礼路や寺社仏閣への配慮が欠けていたり、車を利用して宿泊せずに日帰りでスタンプを取って帰られる方もいらっしゃると思っています。

(和歌山県) また古道を歩く人が増えると、当然ながら路面が削れることがあります。我々は「道普請」活動といって、世界遺産登録以降の2007年6月から、有志で古道を補全する取組を始めました。企業や団体、学校等の要望を聞きながら実施場所を決め、和歌山県世界遺産センターや県・市町の職員が指導等により補助し、土を運んで削れた部分を元の状態に戻していく活動です。活動にかかる「土代」などは実施する団体等に負担いただきますが、これまで県内の古道全体で700団体、40,000人を超える方々から協力をいただいています。



▲サンティアゴ市と田辺市の観光交流協定書を手にする両市長。2014年5月にサンティアゴ市役所に調印式を行った

—— 来訪者も地域に貢献できる仕組みは素晴らしいですね！最後に、熊野古道における今後の取り組みの方向性について教えてください。

熊野古道でいえば、かつて神仏習合によって寺社仏閣が共存している世界でも類まれな文化遺産であると同時に、背景の自然も含めた文化的な景観も、世界遺産として重要な価値を示します。しかし古道そのものは文化財として行政が管理しつつも、その周りの木々等は私有地である場合も多く、景観や参拝者の安全確保のためにどう整備していくのが望ましいのか、判断が難しいケースもあります。これまでそうして来たように、これからも課題を乗り越えて、世界遺産をこの地域の将来に遺していくとともに、引き続き観光客や巡礼者をはじめとした古道を歩く様々な方々に、楽しみながらその価値を正しく啓蒙していきたいと思えます。



▶田辺市観光振興課 池田氏

編集後記

冒頭の画像は、2014年にサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂にて、那智山青岸渡寺による法螺貝、熊野速玉大社の神なぎの舞、熊野本宮大社による男舞、高野山の声明等を執り行った際の様子である。キリストの聖堂内で、日本の信仰が表現される出来事は、前代未聞であったのではないかと推察される。二つの巡礼の先に辿り着いた、思想や民族を越えた繋がりを象徴する一枚ではないだろうか。インタビュー後に訪問した那智大社にて、拡大する訪日外国人観光客について地元ガイドさんに意見を伺ったところ、「近年は一部の観光地で外国人観光客のマナーに関する問題が報道されるケースがあるが、熊野古道においては日本人よりも外国人の方が信心深く、長期滞在によって本当の意味で熊野を理解しようと努力している人もいる。」という言葉聞き、州と県、そして両市や関連事業者等の着実な取組の成果だと思わずにはいられなかった。世界遺産や共通巡礼という共通言語によって、両国や、さらに世界の他の国々の共通点や相違点を知り、互いに学び合うことで、本当の意味でUNESCOが提唱する国際協力や世界平和に繋がっていくのではないだろうか。

【取材先】和歌山県世界遺産センター：丹野氏、土永氏
田辺市観光振興課：池田氏

関連情報

- 共通巡礼達成の条件等（田辺市熊野ツーリズムビューローのウェブサイト）
「二つの道の巡礼者 - 田辺市熊野ツーリズムビューロー」 <https://www.tb-kumano.jp/kumano-kodo/dual-pilgrim/>
- 共通巡礼達成者のウェブサイト
「Dual Pilgrim」 <https://dual-pilgrim.spiritual-pilgrimages.com/>
- 世界遺産保全活動（和歌山県世界遺産センターのウェブサイト）
<https://www.sekaiisan-wakayama.jp/protect/>
- アジア・太平洋地域における信仰の山の文化的景観に関する専門家会議
月間文化財（平成13年11月）